View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by University of Toyama Repository

6th Asia Pacific Traditional Nursing Conference
（第６回アジア太平洋伝統看護学国際会議）印象記

大学院医学薬学研究部人間科学１講座
金　森　昌　彦

小雨降る韓国仁川空港に降り立ったのは学会前日の昼さがりでした。私たち３人（基礎看護学講座の吉井先生と大学院生の三橋君、そして小生）は富山空港からわずか２時間で海外に来たのです。私にとって初めての韓国・ソウルはこれまで何故か近くて遠い国でした。仁川空港からソウルまでの約１時間、日本にも数年在住したという国際タクシーの運転手・イケさんは日本と韓国の文化の差異、そして考え方や雑学まで日本語で説明してくださいました、もちろん韓国至上主義という立場ですが。車は右側通行、高速道路は片道３車線、料金無料な上に道路標識も少しアメリカに似ていて、この風景には少し懐かしいような感じもありました。北の国への脅威から、セオール号の悲劇、ハングル文字の由来、そして２年間の徴兵制の話まで、ホテルに着く前には概ねこの国の歴史文化を理解できるほどでした。ソウル中心部は会話とハングル文字さえ除けば東京と同じような感じです。冬ソナに出てきた田舎の景色が脳裏にあった私には、あまりの違いを感じた次第で、目からウロコとはこの事かもしれません。焼肉とキムチが中心の国と思っていましたが、おしゃれなお店や喫茶店も多く、薄暮の Kyung-Hee 大学周辺は巨大な学生街でもありました。夜の９時を過ぎても若者の姿は減らず、街路の店には灯りが続き、多くの屋台にも活気がありました。

翌朝の 10 月 22 日は天候にも恵まれ、歩いて学会場を訪れました。Kyung-Hee 大学は学生数２万３千人以上を擁するマンモス私立大学です。Medical Center 前の大学正門ゲートをくぐり、中央の坂を少し上がると学会場である Cheongwoon Building がありました。いくつもの立て看板に導かれて我々はメインホールに到達しました。

第６回 Asia-Pacific Traditional Nursing Conference（APTNC）は中国、日本、タイ、台湾、韓国のアジア地域５各国が中心となって、２年ごとに東西の看護学融合を目指し、伝統文化の上に立った看護学を模索する学会です。第３回は富山国際会議場で永山くに子会長のもと開催されたのですが、すでに６年前ということです。受付を済ませると韓国流の熱いおもてなしを受け、学会は開会しました。今回のサブテーマは Transformation of Traditional Nursing: Theory, Research, and Practice で、オーストラリアからの Pamela van der Riet 先生による Key Note Speech（演題名：Attending to Theory, Research and Practice in Optimizing Healing Environments）のほか、招待講演が７人、一般口演発表 18 題、ポスター発表 139 題がありました。口演発表の時だけ３会場に分かれますが、プログラムはメイン会場を中心に進行していきます。メイン会場のみ英語―韓国語の同時通訳がありますが、私たちにとってあまりメリットはありません。太極拳らしきもの、タイのオイルマッサージや chakra（これはよくわかりません）など、アジアの伝統文化の知恵と健康への効果などが演題の中心でありますが、このような技法に看

護力がどのようにかかわっていけるかが問われているようです。

この学会ではまさに、私たちの富山大学杉谷キャンパスの理念である「東西融合医学・医療を目指すこと」が大きなテーマになっています。そのためには海外の先生方、特にアジアの先生方と意見交換し、新しい知見をみつける、そして自分の研究フィールドに取り入れていくことが看護科学の発展において重要であると思われました。今回の学会には冒頭の３人の他、老年看護学講座から青木先生、地域看護学講座から中林先生、鳴尾先生を含めて合計６人が参加して、それぞれの研究を発表されました。

吉井先生と私の演題はGreen Tea Service and Traditional Nursing Practice で、part -1 として感染予防に関する効用を吉井先生が、part-2 として癌予防に関する効用を私が担当しました。看護業務の合間に看護師さんや看護助手さんが行ってきた病棟の配茶サービスは、たぶんアジア独特のものだと思います。そこには体を温める・心を癒すという精神的リラックス効果と医療者患者間のコミュニケーションの向上という効果があります。それらに加えてお茶の成分であるカテキン類（ポリフェノールの一種です）が、感染予防や癌予防という身体的な効能を認めるという実験的裏付け研究を発表しました。これらの結果は本学看護棟５階の感染看護実験室・バイオセラピー実験室で行ってきた基礎看護学領域の成果の一つでもあります。閉会後のBoard Meeting の時にPamela さんから「Green Tea の効果がそんなにあるのなら愛飲したい」というコメントもいただきました。しかし悲しいかな、日本での配茶サービスは 21 世紀になり激減しています。コストやリスクの他にも病棟業務の中では煩雑な業務として扱われ、自動の給茶器、ペットボトル飲料が主となり、残念なことであります。吉井先生の研究では飲み残しのペットボトルのお茶にはむしろ細菌増殖が認められる場合もあるということなので、やっぱり従来の配茶サービスの復活を期待したいところです。

東西融合看護学というテーマを考えるとすればどのような課題を立案するのか難しいのですが、今回は無くなりつつある病棟の配茶業務にエビデンスを求めて実験室研究を行ったものでした。しかし今後の課題としては看護実践の中でのアプローチがより注目されていくでしょう。

今回は看護学科の国際交流の一環として、現在企画を進めているタイのマヒドン大学の窓口でもあるLadaval O.N.先生とも顔見知りになることができ、大きな釣果でした。本学会は２年後には中国（北京）、そして４年後には日本（富山）が主催を担当する順番となります。当大学の理念に向かって、さらなる一歩が内外から求められています。

最後になりますが、本稿の一部は平成26年度学長裁量経費（「富山の暮らしに機能するアドバンスナースの準備教育」）によるものであり、謝辞を申し上げます。